千葉畜セ研報１：65

Salmonella Enteritidis（SE）不活化油性アジュバントワクチンの産卵鶏における野外応用試験

村野多可子・青木ふき乃*1・脇　雅之*2

Field Test of *Salmonella* Enteritidis Inactivated, Oil-adjuvant Vaccine in Laying Hens

Takako MURANO, Fukino AOKI *1, Masayuki WAKI *2

目　　的

国内で初めて市販されたSE不活化ワクチンに関する野外成績は僅かである。そこで今回、このワクチンの生産性に及ぼす影響と有効性について調査した。

材料と方法

赤玉卵産出鶏の１銘柄、ピンク卵産出鶏の１銘柄及び白玉卵産出鶏の３銘柄の計５銘柄（銘柄１～５）をそれぞれ100羽用いた。各銘柄の50羽に104日齢でSE不活化ワクチンを接種し、残りの50羽は無接種とした。接種後２週間は毎日臨床症状を観察した。また増体量・飼料摂取量・産卵諸性能・抗体価を474日齢まで定期的に調査した。475日齢で抗体価測定に用いた鶏（各銘柄接種群８羽、無接種群８羽）にSEリファンピシン耐性株を経口接種し、14日後に全羽数を解剖して、肝臓・脾臓・卵巣・卵管・盲腸内容を採取しSEの分離を試みた。また盲腸便については経時的に排菌数を測定した。

成　　績

臨床症状：各銘柄とも接種１日目に緑白色下痢便が顕著に見られた。増体量・飼料摂取量：各銘柄ともワクチン接種後１週間は明らかに増体量が低下し、摂取量も減少した。産卵諸性能：白玉卵産出鶏の産卵開始が接種群で若干遅れる傾向にあったが、調査期間中の累計では差は見られなかった。抗体価：平板凝集反応とELISA法による抗体価の持続性は銘柄により明らかに差が見られ、銘柄１はピークも低く、持続性も悪かったが、銘柄３は調査終了まで高い価を示した。攻撃試験結果：肝臓・脾臓・卵巣・卵管における菌の検出率は５銘柄ともワクチン接種群と無接種群で有意な差は認められなかった。しかし、排菌数は銘柄２、３、５で調査日により、接種群の方が明らかに低い値を示した。

ま　と　め

ワクチン接種による生産性への影響は、接種後１週以内が最も顕著に見られ、増体量・飼料摂取量・糞便状態が無接種群と比べ劣る傾向にあった。また、１年後の免疫効果は銘柄により異なった。

（鶏病研究会報、第36巻、171－180、2000）

*1 千葉県東部家畜保健衛生所
*2 千葉県印旛支庁農林振興課
平成13年８月31日受付